

地域密着型サードプレイスによる「相談・参加・地域づくり」の一体的支援事業

■取組の概要

地域住民が主体となって運営する「総合型地域スポーツクラブ(NPO 法人クラブしっきーず)」が、屋外開放空間(お寺・神社の境内等)や小学校体育館・町内会館等を会場として、世代や障がいの有無を問わず、地域にクラス全ての人とともに、スポーツやレクリエーション・文化活動をツールに「毎日型の多世代交流」を行い、地域課題の解決をはかる。

■基本情報

○官民連携事例

○事業の実施機関

NPO 法人クラブしっきーず

(正式名称:特定非営利活動法人 志木総合型地域スポーツ・レクリエーションクラブ)

・対象地域:埼玉県志木市

・連携の実施機関

志木市立志木第三小学校、宝幢寺(宗教法人)、行屋稲荷神社(稲荷講)、柏町地区各町内会、志木市役所・志木市社会福祉協議会

○対象者のライフステージ区分

年齢や属性を問わない

■取組の内容

屋外開放空間(お寺・神社の境内等)や小学校体育館・町内会館等を会場に、曜日ごとに会場を決めてほぼ毎日、多世代参加型の体力アップ事業、放課後の居場所づくり、“どなたでも”対象の相談支援サロン、地域サロンなど、事業の出前を行っている。家庭や学校・職場とは異なる、だれもが気軽に交流できる場(第3の居場所=サードプレイス)を創り、そこで日々繰り広げられる“多様な市民交流の連なり”により、深刻化した高齢者のフレイル解消や、他者との関わり方が分からない子どもや若者の成長に繋げている。

■取組にあたって苦労、苦慮した点

「世代や障がいの有無を問わず、だれもが気軽に参加できる居場所」において大切なことは“丁寧な働きかけ”。認知症の方への声掛け、小学校1年生への声掛け、障がいのある方への声掛けなど、「配慮はするけど遠慮はしない」ことを意識して日々活動している。

「差別」に繋がるような発言があったときはそのままにせず、丁寧な説明をし、お互いを尊重することを大切にしている。

■取組の効果

世代や障がいの有無を問わず、いつでもみんなと一緒に(ごちゃまぜ・まるごと型)交流してきたことで、「みんな違ってみんな良い」といった空気感が醸成された。高齢者や特別支援学級の子、小学生も含めて、当クラブの活動では「〇〇!(名前)」とお互いに対等に名前と呼ばれてスポーツを楽しむ。それを誰に言われるまでもなく、「それがしっき一ずの当たり前」として存在していることは大きな成果だと思う。

■取材をして

志木第三小学校体育館を会場とした「多世代参加型の体力アップ事業(7歳から90歳代が参加)」と「放課後の居場所づくり事業(主に小中学生が参加)」を取材しました。

多世代参加型はシニア世代と小学校低学年の子どもたちが車座になり、簡単な自己紹介(今日は何を楽しみたいか一人一言コメント)から始まりました。そして、ストレッチ(ラジオ体操など)、ラダートレーニングで体を慣らし、ハイライトである「忍者隊サーキット」の前後で色別対抗のスポーツレクリエーション合戦(歩く、走る、投げる系)をし、最後は参加者が一同に会し、今日は何を頑張ったか一言コメントと活動を褒めたたえる時間をもっていました。時間の経過につれ、中学年・高学年の子どもたちも入ってきます。印象的だったのは、小学1年生の子どもさんがサッと壇上に上がりラジオ体操の指揮をとっていたこと。また、一連のスポレクを通じて、子どもたちがシニア世代に寄り添い、動き方を教えていたこと。「子どもたちは自然と自分の役割を見つけ始める、そして対等に教え合う、支え合うことを通じて、自己有用感を高め、自信につなげている」とNPO法人クラブしっき一ずクラブマネジャーの増田さんは言います。参加したシニア世代にお話を伺うと、「子どもたちから元気ももらっている」、「ここに来るのが楽しい」、「顔見知りが増える」とのことで、皆さんとても生き生きと素敵な表情をされていました。時間中はずっと名前の入った腕章をつけるので、顔見知りが増えるというのももったもなことから。シニア世代の方のおうちに中学生がお手紙を届けるなど、参加の声掛けをしあうということもあるようです。冒頭の一言コメントタイムで子どもさんが発言にもたついていても、「早くしなさい!」と急がされることもなく、周囲はゆっくりと待ってくれる、こうした家庭でも学校(職場)でもない、視点をちょっと変えたサードプレイスとしての居場所がゆるやかな人と人とのつながりを作り、自己肯定感を育てていけるように感じました。

その後、会場は放課後の居場所に転換。大きい子も小さい子も入り混じって、まずは、今日は何をしようか皆で話し合っただけ、色別対抗のドッジボールやドッチビー(フリスビードッジ)で、広い体育館を子どもたちが縦横無尽に走り回っていました。途中から、

子どもたちからの声掛けで、お仕事を終えられたお母さんや校長先生も参加され、とても和気あいあいとした雰囲気でした。

こうした事業の立ち上げについて、NPO 法人クラブしっきーズ代表の増田さんにお話を伺いました。「クラブしっきーズは 20 年ほど前(平成 12 年)に総合型地域スポーツクラブとしてスタートした。以来、幾度かのステージとコロナ禍の経験を経て、1 か所拠点型でなく、地域の中に会場(屋外・屋内)を分散させて事業を届けるという現在の活動の形に至った。

既に 20 年ほど前から体育館を地域開放されている小学校に加え、お寺や神社の境内、町内会館など様々な活動の場があるが、これらはすべて地域の人とのつながりの中で、「こういうことができるけど」と相談があり活動となり、多チャンネルの中でいろいろな人がかかわって実現できたこと。クラブとしても様々な場に顔を出し、今あるもので、今いる人でどういことができるか、「あるもの探し」をしている。これまで続けてこられた理由は、「スポーツが好き」と「この町が好き」、この 2 つの掛け合わせ。スポーツはコミュニケーションのツールとして使っており、地元の書道の先生のご協力を得て、書道のイベントをすることもメニューの一つになっている。」とのこと。

若い世代の活動への参加も重要です。クラブマネジャーの増田さんは 20 年前は子ども会員としてクラブを利用して、今は専属で運営側に回っているそうです。このほかに、普段は他の仕事をしながら、会計など運営を手伝ってくれている若者(元子ども会員)もいるとのこと。こうした若い世代が隙間時間を見つけながらも活動に関わっていくことは、身近な地域を愛し、地域づくりに参画していく上でもとても大切なことだと感じました。

最後に、取材にずっと付き添っていただいた志木市役所の皆さま、どうも有難うございました。



①小学 1 年生の男の子が壇上でラジオ体操の指揮



②転倒予防のためのラダートレーニング



③小学6年生が進行し、今日の活動を皆で話し合っ決めて。 ④大きい子も小さい子も入り混じっての色別対抗ドッジボール



⑤最後まで残った子どもたちと皆で記念撮影（今日も楽しかったね！）

（取材者 山本麻里）

地域密着型サードプレイスによる「相談・参加・地域づくり」の一体的支援事業（実施体制）

※取組みの概要

地域住民が主体となって運営する『総合型地域スポーツクラブ（NPO法人クラブしっキーず）』が、屋外開放空間（お寺・神社の境内等）や、小学校体育館・町内会館等を会場として、世代や障がいの有無を問わず、地域にらす全ての人とともに、スポーツやレクリエーション・文化活動をツールに『日常的な多世代交流』を行い、地域課題の解決をはかる事業。

